



TITLE:

高圧下におけるアルカリ金属の融点極大現象(融解現象とその周辺(第2回),基研短期研究会報告)

AUTHOR(S):

横田, 万里夫; 島田, 克己

CITATION:

横田, 万里夫 ...[et al]. 高圧下におけるアルカリ金属の融点極大現象(融解現象とその周辺(第2回),基研短期研究会報告). 物性研究 1974, 21(5): H45-H46

ISSUE DATE:

1974-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/88720>

RIGHT:

高圧下におけるアルカリ金属の融点極大現象

大 阪 市 大 工 横 田 万 里 夫
日本ミニコンピューター 島 田 克 己

デバイ温度より高い温度一定の状態では圧力を加えてゆくと、固体の格子定数はへり始めるが、それにともなう格子振動の振幅と格子定数の比が小さくなれば融点が上昇し、大きくなれば降下する。実際の固体では圧力のひくいところでこの比は圧力と共に小さくなるが、その小さくなり方は圧力の上昇と共にへって、遂に一定圧力の変化に対する格子定数のへる割合が振幅のへる割合と同じになるところが生ずる場合がある。このような状態になれば Lindeman の立場からは融点に極大現象があらわれたと考えられる。

一定温度下での格子定数の変化にともなう振幅の変化はデバイ温度の体積変化と関係づけられるので、この現象をしらべるためにはグルナイゼン定数を体積の関数として求めればよい。もしよい近似でグルナイゼン定数が体積のみの関数として求まれば、上のような考え方から融点 $T_m(v)$ は体積の関数として

$$T_m(v) = T_m^0 \exp \left[2 \int_v^1 \frac{r_m(v) - 1/3}{v} dv \right] \quad (1)$$

であたえられる。ここで $v = \frac{V}{V^0}$ で A^0 は圧力 0 での A の値である。さてここでの $r_m(v)$ は融解現象に関係してきめられるべきグルナイゼン定数であるので必ずしもデバイ温度の体積変化から求まるものと等しい必要はないが、まず弾性的な性質と関連づけて論じてみよう。

アルカリ金属では実験的に $\left(\frac{\partial B_s}{\partial T} \right)_v \simeq 0$ がほぼなりたっているのではないかと Rice は主張している²⁾。このことは Microscopic なグルナイゼン定数は高温では充分よい近似で $\langle r_k \rangle$ に等しい³⁾ (c.f.D.C. Wallace 19.62) ことから Wallace の定義した $\langle \xi_k \rangle \equiv \langle V^2 / \omega_k \cdot d^2 \omega_k / dV^2 \rangle \simeq 0$ を意味している (c.f.D.C. Wallace 32.5) $\langle \xi_k \rangle = 0$ は $\frac{dr}{dv} = r + r^2$ or $\frac{d}{dv} \left(\frac{v}{r} \right) = -1$ でこれより Rice の式 $r(v) = v \left[\frac{r_0 + 1}{r_0} - v \right]^{-1}$ がみちびける。これがなりたつための micro な根拠をしらべるために $\frac{dr_k}{dv}$ をなめらかな model potential を用いて計算した。この model potential は変

横田万里夫, 島田克己

化しうるパラメーターを2つ含み, 格子定数, 結合エネルギー, 3つの弾性定数があるように定めた。その結果 $\langle \xi_k \rangle \simeq 0$ である mode は横波の T_1 で次に T_2 かややそれに近いことがわかった。このことから $(\frac{\partial B_s}{\partial T})_V \simeq 0$ になりたちうる micro な根拠は定性的には理解できる。

次にこの Rice の式を $r_m(v)$ に用いてみると Krant と Kennedy の実験で示された $T_m(v)$ と v との直線関係⁴⁾, 又 $T_m(\max)$ の値などもよく説明できるので¹⁾, このことは $r_m(v)$ は $\langle r_k \rangle$ ではなく T_1 mode に大きな weight のかかった或平均値とに求められるべきと考えている。更に 0 度の r_k を上で求めたパラメーターを用いて Mie-Grüneisen の状態方程式から T_m -P の関係を求めるが, これは Kennedy 達の実験⁵⁾ をかなりよく説明する。

- 1) K. Shimada and M. Yokota Phys. Letters 39A (1972) 337.
 - 2) M. H. Rice : J. Phys. Chem. Solids 26 (1965) 483.
 - 3) D. C. Wallace Thermodynamics of Crystals (John Wiley, New York, 1972).
 - 4) E. A. Kraut G. C. Kennedy : Phys. Rev. 151 (1966) 668.
 - 5) G. C. Kennedy, A. Jayaraman and R. C. Newton : J. Geophys. Res. 67 (1962) 2559.
- H. D. Luedemann and G. C. Kennedy : J. Geophys. 73 (1968) 2795.